

書評

書評『通訳学入門』

著者：フランツ・ポエヒハッカー

鳥飼玖美子監訳（訳者 長沼美香子、水野的、山田優ほか立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科院生）

出版社：みすず書房

出版年：2008年

頁数：295

ISBN978-4-622-071412-0

評者：鶴田 知佳子（東京外国語大学）

一読してまず感じたのは、日本語で通訳学文献を読みたい人が必要としていた一冊が誕生したということだ。通訳を教える大学や大学院が増えてきており、必ずしも英語を解する人だけでなく中国語や朝鮮語母語話者の人たちで、日本語で文献を読みたいという人にとっては、本当に今回の日本語訳が出たのはまさに待望の一冊といえるだろう。監訳者ご自身から、本書を翻訳しようと思ったきっかけは、韓国の大学に招かれて講演した際、通訳理論、翻訳理論の本が主として英語で出版されているが、日本語で書いたものはないだろうか、と言われたことであるという。また監訳者が教えている大学院で学ぶ各国語の通訳者から日本語のテキストが欲しいという要望も出ていたそう。同様の声は評者の大学で勉強している各国語の大学院生の間からも聞いていたのでまさに時宜を得た出版と言える。

英語がわかる読者にとっても有難い本である。もともとの英文がかなりわかりにくいせいもあってか、英語で読んだときよりずっと理解が早く進むように思われた。通訳学、という言葉もこの本によって定着するのだろう。この一冊を読まずして通訳研究をすることはできない、という必読書である。もともと、英語での原本が出てすぐに英語で読み、2004年の本学会誌に書評を書かせていただいているが、本書は英語で読んだのとは明らかに違う感覚を持って読んだ。例えていうと、都内のホテルでクライアントと待ち合わせタクシーに乗りミーティング先に行くとき、車窓からみる光景がいつもと違ってみえる、というのと似ているのかもしれない。街の光景は変わらなけれども、日ごろ街をみているときは日本の街だと思ってみているので何とも思わない光景でも、自分以外は英語話者ばかりのタクシーの中から英語で会話をしながら街をみると、英語話者の視点からの街の見方に知らず知らずになっていて、自分が全然知らない街をあらためて眺めているような気分になる。と、こんな説明を加えずともやはり母語の日本語で読むとよく頭にはいるということだろう。

また訳語もこれで定着、ということになるのでは、と思うほどよく考えられている。

必要なところは どうして そう訳したのか、訳語についての注もつけられていて、その点もとても親切である。安易にカタカナに頼っていない点にも好感を持った。訳出にあたっては、読みやすさを追究すると共に著者の意図を汲み取り過不足なく伝えるという翻訳本来の目的のために、印刷所に入れる直前まで吟味したという。通訳学の本に誤訳があってはならないので、正確性についても神経質なくらいこだわり、翻訳チームの中で議論をし、疑問が残る箇所は著者に確認したということだ。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科の教員と院生の協同作業で勉強しつつ仕上げたという成果が発揮されている。またとない教育と研究の機会でもあっただろう。このプロジェクト参加者が学ぶものは極めて大きかったであろうと思われる。

苦労があったと思われるのは、通訳学自体が学際的な研究であるため、専門用語もいくつかの分野にまたがっていることだ。個人的に訳出に関心を持った例をいくつかあげる。

decode 解説

encode 記号化

となっているが、分野によって訳語が異なるのでどれを選択するか考えた上で、コミュニケーション研究で多く使われ、読者にも分かりやすいと考えられるこの訳語になったという。

今までのいくつかの違う訳があったゴフマンの参与フレームワークでの、話し手の三種類の役割、

animator 発声体

author 作者

principal 本人

という訳語が本書をきっかけとして、通訳研究では定着すると思われる。

hedging 「垣根表現」が語用論で専門用語として定着しているという。

situated cognition 「状況的認知」は、全ての人間の認知は状況的である、という認知心理学、認知言語学、アフォーダンス理論などに関連する概念で、認知は一個人の問題ではなく、システム化された周囲の状況との相互作用との考えが根底にある。

reflective 「振り返り」として定着している用語で最近の教育学で重視されている概念。

apprenticeship 応用言語学や教育学で「見習い」として使われている。

transliteration (個別言語) 対应手話変換。

訳語については新しく作らなくてはならないところも多かったと推察される。特に手話通訳の分野で訳語をつくるのは困難を極めたと思われる。上記のように訳語の点で本書に学ぶところは多く、本書は研究者が論文を書くときに必携の本となること、間違いなしであろう。

さらに日本語の学術本として読みやすくする工夫もされている。図や表もすべて日

本語訳してあるのが、目をひいた。一方で「さらなる理解のために」という各章のあとに設けられているまとめのポイントは、この日本語訳で読むと研究者、特に大学院生の研究の手引きになる有益な示唆が多く含まれている。本書の事項索引はきわめて重宝されるものとなる。通訳学の歴史がたかだか、まだ 20 年弱である日本で通訳研究者、大学院生など研究者の卵には最新の通訳理論まで網羅した本格的な入門書の翻訳は嬉しい一冊であり、上述のように通訳研究概念の日本語の訳語定着に資すると思われる。

個人的には、第 4 章パラダイムに登場する *practisearcher* 実務家研究者 という (Daniel Gile の造語だという)言葉こそ、あらためてこの本全体を貫くキーワードだと思った。この本を手にとって日本通訳翻訳学会会員の中から多くの「実務家研究者」が誕生するきっかけになれば、と願っている。

書評者紹介：鶴田知佳子 (TSURUTA Chikako) 東京外国語大学教授。日本通訳学会理事。会議通訳者、放送通訳者。AIIC(国際会議通訳者協会)会員。
